魔王はここに

藍猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔王はここに

【Ｎコード】
Ｎ６５７３Ｙ

【作者名】
藍猫

【あらすじ】

死んで、気付いたら魔王になってました。
・・・なんででしょう？
「そういう運命なんです！」
「誰ですか！？」
ロリ魔王が生きていく話しです。

ぷろろーぐです。（前書き）

書きたいと思っていた魔王&最強系です。

気楽に読んで下さい。

ぷろろーぐです。

私は死んだ。

何もない空間の中で私は唐突に理解する。

・・・あ～あ　つまんない～

やっと人生の楽しみ方ってやつが分り始めたのに・・・

ま、私なりの・・・だけどね

・・・暇・・・

・・・って・・・ん？

あれは・・・だーくほーるか？

え・・・ちょ・・・吸い込まれる！？

い・・・やあああああああああ！！！？

私は死んで、変な空間を漂って、だーくほーるに吸い込まれた。

私を吸い込んだだーくほーるは、役目を終えたように消えていき、後には何もない死後の世界の空間だけとなった。

私はこの空間で、あのだーくほーるにのまれ、別の世界に転生する　そのための”私”であり、別にこれは神様のミスだったりはしない。だからといって嫌われているわけじゃない。ただそういう”運命”だったというだけ。

ま、私は実際そんなことは知らないのだけど。

というより

私は今、

だーくほーるの中にいる。

・・・どうしよう・・・？

ぷろろーぐです。（後書き）

ありきたりな内容でごめんなさい・・・

1話　びしょうじょです。（前書き）

話作るのにはなかなか慣れれないです・・・。

ハア・・・

1話　びしょうじょです。

・・・ここはどこ？

視界が開けたら森でした。

普通の森よりも、なんていうか・・・暗い？感じの森。

にしても動きづらい・・・

私はふと自分の体をみる。

「・・・は？」

なんかちっさい・・・

手も腕も脚も・・・まさか・・・

子供になってる・・・？

というかそもそも私は死んだんじゃなかったっけ？

・・・私は転生した？？

・・・・・・・・・・・・・・・・・・よし。よく分かんないけど理解した。

私は唯一の自慢である並外れた適応力で今の現状に適応する。

んじゃあ今の姿にも適応しますか・・・

トテテテ　と近くの湖へ駆け寄り、覗き込む。

「・・・び・・・美少女・・・」

映っていたのはまさしく美少女だった。質素な黒いワンピースを着ており、見た目は6～7ぐらいの小さな少女。それが自分とわかっていても、しばし魅入ってしまうほどの美貌だった。

「・・・なんか犯罪な気がする・・・」

この見た目で中身が18歳っていうのが。

ガサッ

「・・・誰？」

突然の草の動きに対して私は冷静に聞く。何かがいるっていうのは気付いていたから大して驚くことはなかった。

「ほう・・・。なかなか鋭いようだな。子どもとはいえ魔族ってことか。」

さっきまでこそこそとしていた態度とは打って変わって、堂々と、意味ありげにニタニタとした男が出てきた。厳つい風貌で、背中には大きな両手剣を背負っている。ニタニタとした目に私は無意識にゾクッとする。

「・・・魔族？」

「あ？その黒い髪と瞳は魔族の証だろうが」

湖は少し濁っていたから色まではわからなかった・・・。

「・・・それで、なんの用？」

「・・・何って、決まってんだろ？」

男の目つきが怪しく光る。

森の中にて、

なんだか嫌な予感がします・・・

・・・どうしよう・・・？

1話　びしょうじょです。（後書き）

・・・あ

名前、まだ一度もでてませんね・・・

次ぐらいでだすと思います

2話　うそつきです。（前書き）

「どうしよう」が最後にくるように
なんだかんだで頑張っています。

2話　うそつきです。

「道案内してくれ」

「・・・・・・・・・・・・は？」

先ほどまでのニタニタ笑いが消え、真剣な顔で男が言う。まさか、これほど予想外なことを言われるとは思わなかった私は、１０秒ほど口を開け、唖然としてしまった。

「いや、だからな道案内を・・・な？」

「・・・いやいやいや・・・何でです？」

「迷ったからに決まってんだろ？他に理由があるか？」

「・・・ないですね・・・はい」

緊張していたことが恥ずかしい・・・。私は脱力し、溜息をつく。そして、目線を男に戻し改めて見て、気付く。男からにじみ出る黒いもやに。またにやりとした表情になっている男は気付いていないようだ。

・・・このもやもやとした森の影響？・・・大丈夫だよね・・・？

「どうかしたか？嬢ちゃん？」

男は怪訝そうに聞く。私は思いっきり不安そうな顔をしていた様だ。そのことに気付き、すぐに初対面用の作り笑顔を浮かべる。

「いえ・・・特に何もありません。・・・所で、何故こんな所で迷っているんです？」

ここがどこかも分かっていない私が言えることじゃないな・・・。

「・・・ちょっと人を探してて森に入ったんだが気付いたら迷ってたんだ。」

「うそですね？」

「！！」

男の顔が驚愕に満ちる。

人を探して森に入った？こんな危険そうな森に1人で？・・・ありえない。

道案内？こんな子どもに？馬鹿じゃないの？

仮にこの森が危険じゃないとしても、その大きな剣は何のために？

おかしいことが多すぎる。それに道案内を頼むなら、何故隠れる必要がある？

・・・今なら分かる。あの男からにじみ出る黒いもやは嘘を吐いた証だと。あの男が口を開くたびに黒いもやは出ていた。あの男は嘘ばっかりだ。こういうやつは嫌いだ・・・。この・・・

「うそつきっ！」

ザアアアァァァ・・・

黒ずんだ植物が、私を中心に枯れていった。

今だ森の中にて、

何故か怒りを表わした私の周りの植物が枯れたいきます。

・・・どうしよう・・・？

2話　うそつきです。（後書き）

・・・ごめんなさい・・・

結局名前出せませんでした・・・

しかもなかなか話が進まないです・・・

3話　びしょうねんです。（前書き）

正直いってまだ名前考えてないんです・・・

まさしく「どうしよう・・・？」ですね・・・

3話　びしょうねんです。

「うそつきっ！」

ザアアアァァァァ

私の咆哮と共に弧を描きながら草が枯れる。

ただ、枯れたのは地面に敷き詰められた草だけで、大きな植物や木は私の咆哮に合わせて揺れるだけだった。足元の草が枯れたことに気付いた男は、力なくへたれこむ。

「ば・・・化物・・・ひ・・・ひぃぃぃぃぃ！！」

恐怖に彩られた声野太い声が当たりにこだます。

そんな男に私は無意識に手をかざす。そして力を込めて言葉を発する。

「・・・死んで？」

瞬間、私の感情と共鳴していた周りの木々が伸び、男を襲う。

「ぎ・・・が・・・あぁぁぁぁああ！！」

ブシュ

その音と共に男の声が途絶える。

木々が戻っていく。そこには血一滴もなく、代わりに枯れたはずの草が広がっていた。男を養分にしたのだろう。草はどす黒い光を放っている。

「・・・なに？今の・・・」

私は今起こったことに呆然とする。あの男を殺したのは、多分私。木を操ったのもきっと私なんだろう。でもどうしてこんな力が・・・？

・・・もしかして私、転生したのは異世界？

・・・ならさっきあの男が言っていた魔族っていうのが私・・・？

「う～んややこしい・・・ん？」

何かが近付いていることに気付き、考えることを中断する。

ぐんぐんとすごい速さで気配が近付いてくる。

・・・これは3人？いや、2人か・・・？・・・・・来る！

ザザザザァァァァァァ

ザンッッ！！

森の木々から出てきて影は私の目の前に姿を現す。ビュオオオと風が吹き抜ける。

出てきたのは2人。執事服の少年とメイド服のお姉さん。2人とも漆黒の髪と瞳で神秘的な顔立ちをしており、その綺麗な瞳で私を見ている。

うわ・・・美形だぁ・・・

座り込んだまま呆けていると、綺麗、というより可愛いらしい微笑みを浮かべた執事服の少年（１０～１２歳？）が手を差し出す。

「お手をどうぞ？」

・・・やばい・・・すっっごくきれい・・・。

きらきらした空間にて、

きれいな少年に目を奪われてしまいました・・・

・・・どうしよう・・・？

3話　びしょうねんです。（後書き）

主要人物はどうしても美形にしてしまう・・・

願望とかじゃないですよ？

・・・多分・・・

4話　まおうですか？（前書き）

なかなか進まない～

やっと魔王についての話になってきました！

4話　まおうですか？

「あ・・・ありがとう・・・」

そういって私は少年の手をとる。

少年は顔を赤らめ嬉しそうに私を起こす。

「え・・・と・・・ここはどこなの？」

さっきの男と違って心地良い雰囲気の2人は「ああ・・・」と呟き、どう説明しようか迷っているようだ。少しして少年のほうが言う。

「とりあえず、我が城へ参りましょう」

「へ？城？？」

「はい。我が城・・・魔王城にっっ！」

「・・・・・・・・・・・・・・は？え・・・じゃあ・・・あなたたちは？」

「魔王様の御付の魔族です」

・・・魔王城・・・魔王様・・・魔族・・・

ここが元いた世界じゃない・・・つまり異世界だと認めざるえない言葉だ・・・

死んで、吸い込まれて、異世界に転生した・・・と。なんでこんな事になったんだろう・・・

「・・・気になる事はたくさんあるけど、今はまぁいっか。・・・うん。その魔王城に私を連れて行って。後、この世界にのことを教えてほしいんだけど・・・いいかな？」

前半は独り言。後半は2人に向けての言葉。

2人は快く引き受けてくれた。ちょっと衝撃的な言葉で。

「「もちろんです！！魔王様の言うとおりに！！」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ！？」

「さっ。僕におつかまり下さい！」

「へ？あ、ちょ！？」

つかまってって言うからつかまったにのに、何故お姫様だっこするの！？しかもけっこう嬉しそうですね！？

「・・・って、魔王って私なの！？」

「はい！説明は後でしますが・・・確かにあなたが魔王様です！僕だけじゃなく、ほかの魔族の人達もあなたの存在に気付いてると思いますよ。きっと」

「・・・何でそう思うの？」

「なんで・・・と言いますと・・・存在が、ですかね？」

「・・・答えになってない・・・」

「と、とにかく存在が魔王様なんです！あ、後、その膨大な魔力とか魅力とかですね」

「魔力？　は何となく分かる・・・。けど魅力って？どう見ても私6歳ぐらいだと思うんだけど・・・」

え・・・何？ここの人達ってそっち系なの？うわ～、引くわ・・・

「まぁその話は後でしてくれるんだよね？そういうことならはやく行こ！」

「「はい！！」」

少年の腕の中にて、

あ・・・まだ自己紹介してない・・・

・・・どうしよう・・・？

4話　まおうですか？（後書き）

結局名前はまだ出てないです。

名前が出てから人物像について説明しようと思います。

5話　へんないすです。（前書き）

実はテスト中でした（笑）

更新は日々遅れていくと思うので

あしからず・・・

5話　へんないすです。

「見えてきました」

少年・・・ユウの声とともに長かった森を抜ける。本名は『ユウル＝ミージェル』だと来る途中で聞いた。ユウとおよび下さいと言うから　ユウ　だ。もう1人のメイドのおねえさんは『メリーネル＝リオネラ』で、　メリー　だ。

ゴゥ

耳元で風の切れる音が聞こえる。

少し先には山のように聳え立ついかにも魔王城という風貌の城があった。この辺りは晴れることがないとかで、時折雷の光で照らされる。門の前にはごつい鎧の者が2人（そもそも人なのか？）立っている。

門の前に着くと、鎧が　ガシャ　と音をたてて跪く。（あ、中身いたんだ）

「よくお越しになられた・・・魔王様」

少し涙声なのにギョッとする。

「ずっと待ってたんですよ。みんな」

ユウが耳元で囁く。

「・・・そうなんだ・・・私はまだ子どもだから気は使わなくていいよ。ところで、あなた達の名前は？」

「お心遣い感謝します。私は『オルス』でございます。」

「私は『ルスオ』でございます。」

「・・・オルスにルスオ？似てるんだね・・・。間違えそう・・・。ユウとメリーみたいに姓はないんだ？」

「はい。我々のような身分には姓は存在しません。後、我々二人は間違われても結構です。双子ですので。」

「だめだよ。双子だからってそんなこと言っちゃだめ！名前は大切にしないと！」

私の突然の怒りにオルスとルスオは困惑して唖然とする。だが少しして、弱弱しくもハッキリとした声で2人は私に告げる。

「「ありがとうございます！」」

私はそっと微笑み、ユウに中へ入ることを急かす。

その時の私は、ユウの言っていた魅惑の効果があの2人に効いて

いて動けなかったということは知らない。密かにユウとメリーが頬を赤く染めていたことも・・・。ただ私は城に入って、でかいな～としか思っていなかったんだから。

さして豪華でもない大広間の奥には階段があり、その上にぽつんと黒いいすが鎮座していた。

え・・・ここに座るの？なんか本気で嫌なんですが・・・。

そんな嫌な予感は的中し、私はそのいすに降ろされる。座った途端に何かに覆われる感じがした。別に不快ってわけじゃないからほっておこ・・・

『おぉ～～。あんたが次のご主人様か～。まあよろしく頼むぜ～！』

頭の中に声が響いてくる。

・・・多分このいすなんだろうけど・・・うん！無視！

『それはないぜ～。ご主人様～～』

悲痛っぽい声が木霊した。

変ないすにて、

なんだかめんどくさそうです。

・・・どうしよう・・・・？

5話　へんないすです。（後書き）

少しずつ書く量を増やしていきます・・・

後、これは自分の思うままにやっているので、

話がおかしかったりすると思います。

・・・暖かい目で見守ってくれると嬉しいです・・・／／／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6573y/

魔王はここに

2011年11月25日21時48分発行